

う蝕の時代は終わったのか？ —保健課題としての位置づけについて—

相 田 潤

(北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座予防歯科学教室)

「日本でも、う蝕は減少し、口腔保健の課題としてもはや重要ではない。」ということばを耳にすることがあります。では、う蝕は世界的に保健課題としてどのように位置づけられているのでしょうか？

WHOの口腔保健のウェブサイトを見てみましょう。「口腔疾患の予防およびヘルスプロモーションの計画と方法 (Strategies and approaches in oral disease prevention and health promotion)」のページでは以下のような事柄が述べられています (http://www.who.int/oral_health/strategies/cont/en/)。

「there are profound oral health disparities across regions, countries and within countries.」

「Although common dental diseases are preventable, not all community members are informed of or are able to benefit from appropriate oral health-promoting measures. Under-served population groups are found in both developed and developing countries.」

「Reducing disparities requires far-reaching wide-ranging approaches that target populations at highest risk of specific oral diseases and involves improving access to existing care.」

- ・国際間および国内での口腔の健康に深刻な格差が存在すること
- ・う蝕や歯周病は予防可能な疾患であるにもかかわらず、すべての住民が健康増進の恩恵を受けているわけではないこと
- ・格差は先進国、途上国ともに存在すること

これらの事柄が述べられており、今後の課題として、さらなる研究や多面的な方法の展開が必要だろうとしています。

実際に、この研究の一環である子供のう蝕の格差に関する研究は、「Community Dental Health (Volume21 Number1 March 2004. 68 – 130)」に、60ページ以上に渡って掲載されています。う蝕のリスクファクターのシステムティックレビューを作成するところから始めている壮大な研究で、17カ国が参加した国際共同研究です。

次に、こうした潮流を各国の政府がどのように受け止めているのか、アメリカ合衆国を例に見てみましょう。国立衛生研究所 (National Institutes of Health) の機関のひとつである National Institute of Dental and Craniofacial Researchでは、臨床研究・ヘルスプロモーション部 (Division of Clinical Research and Health Promotion) の臨床研究部門 (Clinical Research Branch) で、以下の4つの研究計画を進めているようです (<http://www.nidcr.nih.gov/Research/Extramural/DivisionOfCRHP.htm>)。

- ・臨床試験 (Clinical Trials Program)
- ・疫学研究 (Epidemiology Research Program)
- ・行動科学・社会科学研究 (Behavioral and Social Science Research Program)
- ・健康格差研究 (Health Disparities Research Program)

2005年の International Association for Dental Research & American Association for Dental Researchの学術大

会では、これらの4分野に関連するシンポジウムも複数開催され、健康格差に関する発表も数多く見られました。ちなみに格差の減少には、集団へのアプローチであるフロリデーションや、特にハイリスクな集団への重点的なシーラントなどが効果があるようです。

こうした世界的な動きは、日本よりもう蝕が減少している国々においてもなお、う蝕の多い人と少ない人との格差が存在し、その対策が今後の課題であることを示しています。日本の都道府県別の3歳児う蝕有病者率は、最も少ない地域で23%、最も多い地域で50%（2002年）と倍以上の較差が見られます。これは健康問題としても、医療経済の問題からも重要な課題であるように思います。「う蝕は放っておいても減少する」ということばを耳にすることがありますが、それが、う蝕の多い地域での対策や、地域格差を減らすための試みをストップしてしまうことにならないことを願いたいと思います。

【著者連絡先】

〒060-8586 北海道札幌市北区北13条西7丁目
北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座
予防歯科学教室

相田 潤

Tel : 011-706-4256 (直通4255) Fax : 011-706-4918

E-mail : aidajun@den.hokudai.ac.jp